

跡見学園女子大学文学部紀要 第五三号 (二〇一八年三月十五日)

『源氏物語』における反語表現

—会話文中の「ヤハ」「カハ」について—

Rhetorical Question in the *Tale of Genji*: About “yaha” and “kaha” in Conversational Sentences

永田 里美

NAGATA Satomi

要 旨

形式的には疑問文で聞き手に問いかけながら、話し手は当然の応答として、聞き手に反対の結論を要求する用法を「反語」と定義すると、中古では疑問の助詞「ヤ」、「カ」が助詞「ハ」を伴ったとき、特にその意味を担うことが多いとされる。従来、「ヤ」、「カ」についての特性は研究が重ねられてきたが、「ヤハ」、「カハ」の反語表現については未だ不明な点が少なくない。そこで、本稿では中古の和文資料である『源氏物語』の会話を調査対象とし、「ヤハ」、「カハ」の結びの形式に着目しながら、表現価値の異なりについて考察を行った。調査結果から言えることは以下のとおりである。

- 「ヤハ」
- ・用例のほとんどが反語表現と解釈される。

- ・結びの形式には「基本形」(存在詞多数)「ケリ」(過去)「ズ」(打消)「ヌ」(完了)「リ」(存続)など、客体的、既実現・現実の要素が認められる。
- 「カハ」
- ・用例には反語の解釈であるか否か、揺れるものが見られる。

- ・結びの形式には「ム」(推量)「マシ」(反実仮想)「ケム」(過去推量)「ラム」(現在推量)など、主體的、未実現・非現実の要素が認められる。

これらの特徴から、「ヤハ」は、話し手が直截的な事柄を二者択一で示し、聞き手に当該事態の不成立を訴える反語表現であるのに対し、「カハ」は、話し手が想像を介して不定を示し、聞き手に幾つかの回答案を前提として話し手のいわんとする当該事態の不成立を訴える反語表現であると理解される。

『源氏物語』では女性が会話文で「ヤハ」を使用する場合、それは、あからさまな物言いをする人物造型あるいは場面設定として描かれることが認められる。反語表現「ヤハ」、「カハ」は、論理的に見れば、問うた事柄の反対の結論を聞き手に求めるものであるが、その表現性という観点から見れば、直截的な既実現・現実事態を問う「ヤハ」と推量の助動詞を用いて未実現・非現実事態を問う「カハ」とでは聞き手に対するニュアンスが異なっていることがわかる。

はじめに

(例1) また、めぐり参るとも、かひやははべるべき。

「生まれ変わってまた、あなたと巡り会い申すとしても、親子であることが分らないとあつては、甲斐がありませんようか。いえ、甲斐などありますまい。」

御息所↓落葉宮「夕霧」『源氏物語』

(例2) 親に数^{かず}まへられたてまつらず、世に知られでは何のかひ^かかはあらず。

「親に子としてお扱いいただけず、世間に埋もれているのでは、何の甲斐があるのだろう。いえ、甲斐などありますまい。」

玉鬘乳母の息子↓乳母の家族「玉鬘」『源氏物語』

形式的には疑問文で聞き手に問いかけながら、話し手は当然の応答として、聞き手に「反対の結論を要求する用法を「反語」と定義する⁽¹⁾」、中

古には、疑問の助詞「ヤ」、「カ」が存在し、それらが助詞「ハ」を伴ったとき、特にその意を担うことが多いとされる。右に挙げた例文(1)、「(2)」がともに「甲斐などない」ことを聞き手の応答として求めている反語と解釈されたとおりである。

では、同じ応答をめざしながら、「ヤハ」と「カハ」との間にはどのような表現価値の異なりが見られるのであろうか。古来、疑問の助詞「ヤ」、「カ」については研究が重ねられてきているが、「ヤハ」、「カハ」の振る舞いについては未だ不明な点が少なくない。そこで、本稿では中古の和文資料である『源氏物語』をとりあげ、聞き手の応答が捉えやすい会話文を対象として「ヤハ」、「カハ」を調査し、⁽²⁾ それらの結びの異なりに着目しながら、両者の表現価値について考察を行いたいと考える。

一、先行研究「ヤハ」、「カハ」について

助詞「ヤ」、「カ」が疑問に関わり、これらの助詞が下に「ハ」を伴ったときに反語の意となることは古来より、歌論書をはじめとして註釈されてきたことではあるが、これらの助詞の文法的な機能を取り上げたものに、富士谷成章の『あゆひ抄』(安永二年)がある。

そこでは「ヤハ」と「カハ」の異なりを次のように説く。

「何やは」里「カヤ」と言ふ。心反りて落着する事(かは)に似て、彼はおしなべたる理によりて静かに、これは目のあたりの勢によりて

表をおさふるを、たがへりとす。これ「か」と「や」のたがひめなり。
 二の言葉もとより受け様も同じからず。また先づ頃、「かは」は言わねどしるき理を思はせ、「やは」は、よし見よかしの心を含めりと人に教へらる。

右に挙げられているのは「ヤハ」、「カハ」の文末の用法であるが、言葉を補いながら解釈すると次のようになる。

「ヤハ」は口語で「カヤ」と訳す。反語となつて落着けることは「カハ」に似ているが、「カハ」が一般論から静かに説くのに対して、「ヤハ」は「目のあたりの勢い」で説くことを相違点としている。これは「カ」と「や」の相違点で（も）ある。二つの助詞はもともと受ける語も異なる（カは体言・連体形を、ヤは終止形を受ける）。また先日、人に『カハ』は言わないけれども明白な道理を思わせ、『ヤハ』は、これみよがしの心を含んでいる」と教えられた。

成章はこの章段以前に、「ヤ」と「カ」の異なりについて、「問う」のが「ヤ」で「思う」のが「カ」であると意味の差異を述べる。また、述部を問うのが「ヤ」（肯否疑問文）、不定部分を問うのが「カ」（不定疑問文）であると構文上の差異をも指摘する。⁽³⁾このことについては既に先学で指摘されているように、意味論としては文末には当てはまるが、文中表現には一概に当てはまらなるとされるものの、構文論的な指摘は大方、

異論のないものとなっている。従来、「ヤ」と「カ」については、その変遷や意味論、構文論的研究がなされてきたが、「カハ」と「ヤハ」については、未だに考究はなされていないようである。例えば、小田（二〇一五）では『や』『か』に『は』をつけた強調形『やは』『かは』は反語として用いられることが多い形式で、特に『やは』は実例のほとんどが反語表現である。（二五六頁）と述べられているが、なぜ「ヤハ」が反語表現になりやすいのか、ということまでは示されていない。

そこで本稿では、成章の指摘する

「ヤハ」…目のあたりの勢い、よし見よかしの心

「カハ」…おしなべたる理によりて静かに、言わねどしるき理の意味するところにも目を配りながら、考察を進めてゆきたい。

二.『源氏物語』における「ヤハ」

最初に、「ヤハ」について見てゆく。以下に例を挙げ、反語に関わる助詞とその結びに傍線部を付しておく。結びの特性については後述したい。

（例3）「ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂を放たれたる光やはおはする。ただこれを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし。」

「ものには限りがあるものなので、（紫の上が）優れていらつしやるといっても、仏のよう頭上を照らす光はございますか（いえ、

「ごさいません」。ただこの玉鬘を優れていると、申し上げねばならないようだよ」

右近↓玉鬘乳母「玉鬘」

(例4)「さこそはいにしへも御心になはぬ例多くはべれ、一とこころやは世のもどきをも負はせたまふべき。いと幼くおはしますことなり。」

「皇女が御意に反した結婚をする例は多くごさいます、あなた一人が世間の非難をお受けになるであろうか(いえ、なるはずがない)。全くお考えが甘く、ごさいます。」

大和守↓落葉宮「夕霧」

(例5)「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしてはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、……」

「それではどうにもならないようだ。私は命を絶たぬか(いえ、絶ってしまおう)。諦めきれなかったから、こうしてまでも生きてきました……」

柏木↓女三宮「若菜下」

(例6)「愛宕の聖だに、時に従ひては出でずやはありける。深き契りを破りて、人の願ひを満てたまはむこそ尊からめ。」

「愛宕の聖でさえ、時によつては京に出ないことはあつたか(いえ、京に出ました)。深い誓願を破つて、人の願ひを満たされるからこそ尊いのであらう。」

薫↓弁の尼「東屋」

『源氏物語』の会話文中に「ヤハ」は五七例、見出された。このうち

打消しの助動詞「ズ」を結びとした次の四例(例7、9、33)は相手の意志を問うもので、反語というよりは誘いの意に近いが、それ以外は反語と解釈される。

(例7)「もししばしも遅れんほどは、譲りやはしたまはぬ」などぞのたまはする。

「もししばらくでも私の方が生き残ることになったならば、(宮の)世話をお譲りくださらぬか。」

冷泉院↓阿闍梨「橋姫」

(例8)「さりともしあしさまには聞こえじと、まかせてやは見たまはぬ。」

「(匂宮と中の君の結婚を)まさか悪いお取り計らいは申し上げまいと、私に任せて御覧にならぬか。」

薫↓弁の尼「総角」

(例9)「さらば、その心やすからん所に、消息したまへ。みづからやはかしこに出でたまはぬ」とのたまへば、「仰せ言を伝へはべらんことはやすし。いまさらに京を見はべらんことはものうくて。」

「では、その気のおける所に便りをください。あなたご自身はそこに、出向はならぬか。」と薫が仰ると、「お言付けを預かるのはたやすいことですが、いまさら京の土を踏みますのも億劫で。」

薫↓弁の尼「東屋」

さて、「ヤハ」について着目されるのは、右の用例に傍線部で記してきたように、結びに存在詞、ないし「アリ」を含む活用語が多いということである。以下に示すのは、「ヤハ」の結びの語についてまとめたもので

ある(表1)。表中の網掛け部分については本文に異同が見られたことを示す。

結び	略
用例数	24
基本形	9
ベシ	6
ズ	5
ケリ	5
キ	1
メリ	1
ムトス	1
ケム	2
ム	3
計	57

(表1)

表中、最も多いのは結びの略であるが、次に基本形の結びが目立つ。その内訳(括弧内は用例数を表す)は

・あり(6)、おはす(1)、思ひはべり(1)、ものしたまふ(1)

であり、存在詞が多い。

残る助動詞についても「ベシ」「ズ」「ケリ」「メリ」は潜在的に存在詞「アリ」を含むものである。「アリ」については、小柳(二〇一四)で『あり』を含むものはすべて既実現・現実を表す」と指摘⁽⁵⁾されている。

また、北原(一九八一)による構文的な観点に立つと、これらの「ベシ」「ズ」「ケリ」「キ」「メリ」は客体的な表現を必ずり得る助動詞とされる。助動詞「ナリ」を基準に、それに上接するものは客体的表現、下接するものは主體的表現を必ずり得るというもので、「キ」は常に上接、「ベシ」「ズ」「ケリ」は上接も下接も可能であるが、下接の用法は限られている。また、「メリ」は助動詞「ナリ」に下接する助動詞ではあるが、その活用形のあり方から客体的要素が強いと指摘されている。

他方、表中の網掛け部分の「ケム」「ム」は北原(一九八一)によれば常に助動詞「ナリ」に下接しかなしい主體的な表現を担う助動詞である。小柳(二〇一四)では「未実現・非現実」を表す助動詞に分類される。ただし、これらの用例のうち四例には、次のような異文の存在が認められた。

(例10)「人におとされたまへる御ありさまとて、めでたき方に改めた

まふべきにやははべらむ」

↓青表紙本系「や」

(例11)「死にはつとも、ただにやは棄てさせたまはん。」↓別本系「や」

(例12)「さばかりの紛れもあらじものとてやは思したちけん。」

↓青表紙本・別本「とては」「とや」、河内本系「とや」

(例13)「しかおはしましたらむを、立ちながらやは帰したてまつりた

まはん。」↓青表紙本系「や」、別本系「たまはんとする」「する」

右に示すように「ヤハ」推量の助動詞の構文をとる本文は、助詞「ヤハ」が「ヤ」となったり、推量の助動詞が「基本形」となったりする揺れが見られる。こうした傾向から、「ヤハ」は基本的に現実事態・客体的事態を問う反語表現ではないかと解釈される。ここに、成章の指摘する「目の当たりの勢い」「これ見よかしの心」の根拠があるのではないかと思われる。

高山(二〇一六)では、中古の和文資料の疑問文、約一万二千の用例数のうち、約七割がモダリティ形式(ム、ラム、ケム、マシ、ジ)を伴

うと述べている。これを同論考では「観念型疑問文」と称する。

一方、モダリティ形式を使用しない疑問文を「現場型疑問文」と称し、その特徴として次の五点を挙げる。

- ① 対話場面が目立つ（問答、即答性が高い）
- ② 存在詞の使用が多い
- ③ 述語は基本形、キ・ツが多い（タリ・リ・ヌ・ケリ少数）
- ④ 「〜と問ふ」等で質問文であることを明示
- ⑤ ダイクシス要素（指示詞）などが目立つ（高山二〇一六・三八頁）

本稿の調査における「ヤハ」は右の「現場型疑問文」にかなり近い性質を持つていると言える。また、(例 10)「(例 13)」で挙げたように、「ヤハ」が推量の助動詞を結びとする本文「ヤハム」を「ヤム」とする異文が存在するのは、中古の疑問文が推量の助動詞を伴いやすい性格に拠るものであろう。こうした背景にあつて、「ヤハ」の結びが推量の助動詞を伴わず、現実・客体的事態を表す語に偏することは着目されてよいと考える。

三.『源氏物語』における「カハ」

続いて「カハ」を見てゆく。本稿の調査範囲は『源氏物語』の会話文であるから、「カハ」においても「現場型疑問文」の特徴が見出されてよいかと思われるが、実際はそうではない。

次の表 2 に挙げるように、「カハ」の結びには推量系の助動詞が用例

の大半を占めており、「カハ」は「観念型疑問文」に相当するのである。表 1 同様に、網掛けの部分は本文に異同があつたことを示している。

用例数	結び
45	略
35	ム
2	マシ
2	ベシ
1	ケム
1	ラム
2	基本形
1	リ
89	計

(表 2)

(例 14)「何ばかり、世の常ならぬことをかはものせん。かの、心ざしおかれたる極楽の曼荼羅など、このたびなん供養すべき。」

「何ほども、世の常でないことをしようか（いや、並々のことをするつもりだ）。あの紫の上が発願して作っておられた極楽の曼荼羅などを、このたび供養するつもりだ。」 源氏↓夕霧「幻」

(例 15)「世に人めきてあらまほしき身ならば、かかる御ことをも、何かはもて離れても思はまし。」

「もし世間並に暮らしたいと思う身ならば、こうした婚姻のお話をどうしてお断りするだろうか（いえ、お断りはしません）。」

大君↓弁の尼「総角」

(例 16)「かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも恥づかしくも思すべき。」

「このような山林で勤行なさる御身に、何ごとに恨めしくも恥づかしくも思いになるはずのことがあろうか（いえ、何もない）。」

僧都↓浮舟「手習」

表2の中で、「カハ」の結びとなる「ム」「マシ」「ケム」「ラム」は北原（一九八一）によれば主体的な表現をあずかる助動詞であり、「ベシ」は主体的表現と客体的表現を両有するものであった。一方、表中の網掛け部分の「基本形」、助動詞「リ」は客体的な事態を表すものであるが、これらについては次のような異文が認められた。

(例17) 「かかるをりの御あつかひも、誰かはかばかり仕うまつる

↓別本系「か」

(例18) 「よし、かく言ひそめつとならば、何かはおれてふとしも帰りたまふ。」
↓青表紙本系、河内本系「給はん」

(例19) 「あはれ何ごとかは人に劣りたまへる。いかなる御宿世にてやすからずものを深く思すべき契り深かりけむ。」
↓青表紙本系「たまへる」無し(三条西家本)

これらは助詞「カハ」が「カ」となっていたり、「ヤハ」の場合とは反対に、述部が「基本形」であるものは推量の助動詞を伴っていたり、基本形そのものが欠如したりする本文が見られるのである。

このように「カハ」は「ヤハ」とは異なり、「観念型疑問文」を型とする傾向にある。また文意をたどってみても、反語の解釈がほとんどだった「ヤハ」とは異なり、「カハ」は反語か否かの截然とした差が設けにくい例が見られる。すなわち、「ヤハ」の場合、「ヤハハヌ」の勧誘用法

以外は反語と解釈が可能であったのに対して、「カハ」は採集した用例数一〇七のうち、不定疑問文が一八例あり、反語か否かに解釈の揺れる例が一三例存在していた。⁽⁸⁾

【反語と解釈されない用例…不定疑問文】

(例20) 「ここにかう弾きこめたまへりける。いと興あることかな。いかでかは聞くべき。」とのたまふ。

「こちらの明石では見事な奏法を人知れずお持ちなのだ。まったく興あることだよ。どうしたら聞くことができようか。(聞きたいものだ)」
源氏↓明石入道「明石」

(例21) 「一条宮渡したてまつりたまへることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは(知りたいものだ)」と、いとおほどかにのたまふ。

「一条宮を京にお移り申し上げたとか、あの大殿あたりで噂を申しておりますが、どういう御事か」と、まったくおつとりと仰る」
花散里↓夕霧「夕霧」

【反語か否か、解釈が揺れる用例】

(例22) 「さらにかやうの御消息うけたまはり分くべき人もものしたたまぬさまはしろしめしたりげなるを、誰にかは。」

「いっこうに、こうしてお便りをお聞き分けなさることのできる人もいらつしやらぬことは、お分かりになつていらつしやるよう

に存じますが、誰にお取次ぎ申したら良いのか……。」

女房↓源氏「若紫」

(例 23) 「みづからの罪を思ひ知るとても、いとかうあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ。」と、いとほのかに、あはれげに泣いたまうて、

「情けないこの身の過ちはよく存じているとしても、ほんとうにこんなひどい仕打ちをどのように考えるべきであろうか(もはやわからぬ)。」と、まったく消え入るように仰り、悲しそうに泣きなさつて」
落葉宮↓夕霧「夕霧」

(例 24) 「かく思しかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推しはかりたまはむ。なほ、いとかく、おどろおどろしく心憂く、なり集めまどはしたまひそ。」

「こうまでお企みになった心のうちをあの匂宮も、どのようにお取りなさるであろうか(ただ男女の仲を取沙汰するばかりでしょう)。どうかやはり、間近にお近づきになるなど恐ろしく情けないことをなさつて私を困らせないでくださいませ。」

大君↓薫「総角」

(例 22 ↓ 24) は、反語の解釈が可能であるものの、聞き手に反対の結論を訴えているというよりは、「どうしてよいかわからない」、「この気持ちに思いを巡らせてほしい」という文意が読み取れる。こうした用例では自己の内面における困惑(不定)の意味が強く、反語と不定疑

問文との間に截然とした差を設けにくい。「ヤハ」に比して、婉曲的なニュアンスがうかがえる。

この性質から「カハ」が用いられる場面には、聞き手が不在であるかのような用例も見られる。次に挙げるのは、致仕大臣が夕霧との会話において、柏木の死について思いを語る場面である。夕霧が目の前にいながら、聞き手に反対の結論を求めるわけでもなく、大臣は悼みに耐え切れず空を仰ぐばかりである。

(例 25) 「たへがたく恋しかりけれ。何ばかりのことにてかは思ひさますべからむ」と、空を仰ぎみてながめたまふ。

「たまらなく恋しいのだ。どれほどのことであれば、この悲しみを忘れることができるのだろう。」と空を仰いでぼんやりとしていらつしやる。」
致仕大臣↓夕霧「柏木」

また、聞き手に積極的に結論を求めないという点において、「いやはや」程度の意味合いしか持たない応答詞的な語法が存在する。

(例 26) 「わが心地に飽くべき限りなく習ひとらんことはいと難けれど、何かは、そのたどり深き人の、今の世にをさをさなければ、片はしをなだらかにまねび得たらむ人、さる方かどに心をやりてもありぬべきを、」

「自分としては満足ゆくきまりがなく、ならい取ろうとするのは

たいそう難しいけれど、いやなに、そうした奥義を究めた人は今の世になかないのだから、その一端を無難に学び取った人が、その方面で満足してよいわけだが」

源氏↓夕霧「若菜下」

このように「カハ」は「ヤハ」とは異なり、「観念型疑問文」の構文をとり、自己の内面の戸惑いを表す例が多い。成章が「おしなべたる理によりて静かに、言わねどしるき理」とするのは、「カハ」が聞き手に問いかけはするが、当然の応答を聞き手に求めるといよりは、想像（非現実）の範囲において自己の煩悶を表すことに拠るものではないかと思われる。

四. 『源氏物語』における「ヤハ」と「カハ」と人物造型

以上の結果をまとめると、次のようになる。

「ヤハ」

- ・用例のほとんどが反語表現と解釈される。
- ・結びの形式には「基本形」（存在詞多数）「ケリ」（過去）「ズ」（打消）「ヌ」（完了）「リ」（存続）など、客体的、現実・既実現の要素が認められる（表1）。

「カハ」

- ・用例には反語の解釈であるか否か、揺れるものが見られる。
- ・結びの形式には「ム」（推量）「マシ」（反実仮想）「ケム」（過去推量）「ラム」（現在推量）など、主体的、非現実の要素が認められる（表2）。

これらの傾向を踏まえ、ここで会話文における「ヤ」と「カ」の振る舞いについて確認しておきたい。

高山（二〇一六）の指摘するように、中古の疑問文の多くは推量の助動詞を伴う「観念型疑問文」である。このことは会話文中でも同様であり「ハ」を伴わない「ヤ」疑問文は次の用例が示すように推量の助動詞を伴いやすい。

（例27）「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。」

「こちらはまる見えではないでしょうか。今日に限って端近な所にいらつしやることだ。」
僧都↓尼君たち「若紫」

（例28）「さやうに聞こしめすばかりにははべらずやあらむ」

「そう改めてお聞きあそばすほどのことはございませんでしょう」
命婦↓源氏「末摘花」

また、本稿の「会話文」という文体上の調査において「カハ」は「観念

型疑問文」になると述べたが、その一方で「カ」疑問文には会話文であっても「現場型疑問文」である例が存在する。つまり、疑問の助詞「カ」は推量の助動詞を常に要求するわけではないのである。

(例 29) 「さば、見むよ。女の文書きはいかがある」

「それならば、見るよ。女性の手紙の書きぶりはどんなものかい。」

匂宮↓中の君「浮舟」本文異同なし。

(例 30) 「などかいと久しかりつる。いかにぞ……」とのたまへば、「し
かしかなむたどり寄りてはべりつる。……」

「なぜ、たいそう時間が掛かったのだ。どんな様子だ。……」と

源氏が仰ると、惟光は「これこれのことで、ようやく尋ね寄りて
ございましたのです。……」 源氏↓惟光「蓬生」本文異同なし。

本稿でみてきた「ヤハ」、「カハ」の結びの特性は、反語のスタイルとして意識されたものであると考えられる。

「ヤ」は、そもそも述部を問う(肯否疑問文である)ことから、その事態が成立するか否か、さらにいえば「あるかないか」という二者択一を迫る。それが反語「ヤハ」の場合、既実現・現実事態について直截的に否定の回答を聞き手に突きつけるという意味で、聞き手への配慮に欠ける表現といえる。成章の言う「これみよがし」のニュアンスが出る。

一方、「カ」はそもそも、既定の事態の一部を不定とするもの(不定疑問文)であるから、回答案にはいくつかの選択肢がある。それが反語

「カハ」の場合、想像(未実現・非現実)を介して話し手の意図する回答を選ぶことになる。そこに、推量の助動詞の生起が関係しているのではないかと考える。それは婉曲的でもあり、成章の言う「言わねども、静かに理を表す」のニュアンスが出る。

そのような「ヤハ」、「カハ」の表現価値の異なりは、『源氏物語』の人物造型にも影響を与えているようである。聞き手配慮という観点から「ヤハ」は女性から男性へは使用されにくいようである。もし、女性から男性へ使用されていた場合は、次のように、あからさまな物言いをする女性像、あるいは、その女性のいつにない様子という場面として描かれる。

次の(例 31)は、源氏と朧月夜の密会を知った弘徽殿の太后が過去の源氏方への恨みも相まって、憤慨する場面である。

(例 31) 「をこがましかりしありさまなりしを、誰も誰もあやしとやは
思したりし。……」と、すくすくしうのたまひつづくるに、さすがに
いとほしう

「源氏と朧月夜の密会というぶざまなことになったのを、誰が不都合なこととお思いになったか、いや、ならなかった。……」と、弘徽殿の太后はすけずけとはつきりと仰せ続けになるので、夫の右大臣はさすがにお困りになって」

弘徽殿太后↓右大臣「賢木」

また次の(例32)は、玉鬘に心を奪われる夫に対して、北の方が心乱す場面である。気を病んだ北の方は、この後、玉鬘に逢いに行こうとする夫に火取りの灰をかけてしまうという常軌を逸脱した女性として描かれる。

(例32)「大殿の北の方と聞こゆるも、他人^{たひと}にやはものしたまふ。……」

とのたまへば、「いとよのたまふを、例^{れい}の御心違^{ごころがへ}ひにや、苦しきことも出で来む。……かかることの聞こえあらば、いと苦しかるべきこと」

「源氏の北の方と申し上げる方も、「私には赤の他人か、いいえ、私の異母妹です。……」と北の方が仰ると、夫である髭黒大將は、「ずいぶんわがりの良いことを仰るが、また気を病んだ発作であろうか、困ったことが起きよう。……こんな話が源氏方に聞こえてもしたら、ほんとうに困るであろうことよ。」

北の方↓髭黒大將「真木柱」

次の(例33)は年に似合わぬ色好みの女性、源典侍が源氏に誘いの言葉かけける場面である。女性から男性へ声をかける行為は、はしたないとされる。

(例33) 扇をさし出て人を招き寄せて、「ここにやは立たせたまはぬ。所避^{しよひ}りきこえむ」と聞こえたり。いかなるすき者ならむと思されて

「ここに車を寄せならぬか。場所をお譲りしよう」と申し上げた。
(源氏は) どん^どんな好色の女性であろうとお思いになつて」

源典侍↓源氏「葵」

藤原(二〇一四)では、古語の依頼表現について「給へ」の存在に着目し、それが現代語の命令形とは異なり、相手への配慮を示す表現であることを示している。同論考では川上(二〇〇五)が勧誘表現の体系において「ヤハハ」をもつとも婉曲的であると位置づけることに疑問を投げかけている。本稿の調査においても、「ヤハ」を用いた表現には婉曲的というよりは、直截的なニュアンスがうかがわれる。⁽¹⁰⁾

一方、「カハ」は事柄の成立において、聞き手に想像させ、幾つかの回答案の中から選択させるという意味で、聞き手への配慮が働く表現であるといえる。こちらは、前掲の用例(例15)、(例22)―(例24)のように女性にも用いられやすい。

五. おわりに

本稿では「ヤハ」、「カハ」について、『源氏物語』を資料とし、その構文上の異なり、および意味合いの差異を論じてきた。既実現・現実的な事態を問う「ヤハ」と未実現・非現実的な事態を問う「カハ」とでは、聞き手に対するニュアンスが異なることから、『源氏物語』ではその使用において、人物造型がなされることもうかがえた。

今後は、調査対象を中古の和文系資料全般へと広げることによって、さらに「ヤハ」、「カハ」の語法を明らかにするとともに、富士谷成章の指摘する内容の検証を行ってゆきたい。また反語表現を担うものとして、打ち消しの助動詞を伴った否定疑問文「〜ズヤ」、「〜ザランヤ」、「〜ジヤ」、「〜マジヤ」、「〜ヌカ」、あるいは推量の助動詞を伴った「〜ムヤ」などとの比較考察も必要であろう。今後の課題としたい。

【註】

- (1) 西洋の修辞法では「修辞(的)疑問(Rhetorical question)」と称されることが多い。訴えかけの文彩としては設疑法ないし設問法の下位に位置付けられる。また、「反語法」とは例えば「テストで欠点ばかり取り続けているとは、まさに天才だ」というように、表現形式と内容が食い違っているものを指す。この観点に立つと、修辞疑問文は大きくは反語法の一つでもあるが、本稿では伝統的な国語学一般に使用される用語として「反語」を用いる。
- (2) 調査にあたっては、コーパス検索アプリケーション「中納言」(国立国語研究所)を用いて、『源氏物語』の「会話文」から、キーとして助詞「ヤ」、「カ」、後方共起語として助詞「ハ」を含む用例を抽出した。その後、稿者が『新編日本古典文学全集』(小学館)にて確認をした。なお「会話文」中であっても、「〜と思ひて」など、心中思惟の引用であると解釈される用例は削除した。
- (3) すべて、里言に「カ」と言ふに、「思ふカ」「問ふカ」の二つあり。「思ふカ」は「か」に当たり、「問ふカ」は「や」に当たり。(中略)疑問の挿頭を受くるに「か」は上に詠みて下に詠まず。「や」は下に詠みて上に詠まず。

「すべて口語でカというところに、古語では思うカと問うカの二つがある。思うカは「カ」に当たり、問うカは「ヤ」に当たる。(中略)不定の語を受けるのに「カ」は(誰カのように)上に不定語が位置するが、ヤは(〜ヤ誰)のように下に位置する。」

- (4) 此島(一九七三)等。
 - (5) 野村(一九九四)『あり』は基本的に何かが漠然と存在するのではなく、今ここに存在するという実在を表す。
 - (6) 池田亀鑑編『源氏物語大成』(中央公論社)による。
 - (7) 調査対象は『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』(「葵」・「朝顔」巻)における疑問文(反語表現も含む)一二八二例である。(同論考三二―三三頁)
 - (8) 表2中の用例数八九には「カハ」が反語か否か、解釈が揺れた用例数も含まれる。
 - (9) 弘徽殿の女御の口さがの無さは、森野(一九七五)において係助詞や敬語の使用法の観点から詳細に分析されている。
 - (10) なお、ヤハの結びが略される場合は女性から男性への使用も認められるが、手紙などに多く、会話文中では少ない。
- (例)「もの思はしきをりをりありし御心ざまの思ひ出らるる節ぶしなくやは」とほほ笑みて聞こえたまへば「私を悩ませた折々のあなたの心様が思い出されない時々がないとでも?」紫の上↓源氏「胡蝶」
- この例は源氏の「など頼もしげなくやはあるべき」「どうして私が頼りないことがあるか」という反語をふまえた諧謔的な表現であるとも読み取れる。

【参考文献】

- 小田勝(二〇一五)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
岡崎正継(一九九六)『国語助詞論攷』おうふう

- 川上徳明（二〇〇五）『命令勧誘表現の体系的研究』おうふう
- 北原保雄（一九八一）『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 此島正年（一九七三）『国語助動詞の研究』桜楓社
- 小柳智一（二〇一四）「古代日本語研究と通言語的研究」（定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話・テンス・アスペクト・ムード研究を通して』）くろしお出版
- 近藤泰弘（一九八七）「古文における疑問表現、「や」と「か」」『国文法講座 3 古典解釈と文法・助詞の機能』（『日本語記述文法の理論』ひつじ書房 二〇〇〇年 所収）
- 阪倉篤義（一九九三）『日本語表現の流れ』岩波書店
- 佐々木健一他（二〇〇六）『レトリック事典』大修館書店
- 高山善行（二〇一六）「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』九三・五 東京大学国語国文学会
- 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆみ抄新注』風間書房
- 野内良三（一九九八）『レトリック辞典』国書刊行会
- 野村剛史（一九九四）「上代語のリ・タリ」『国語・国文』六三（一）
- 藤原浩史（二〇一四）「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」（野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語配慮表現の多様性』くろしお出版）
- 松下大三郎（一九七四）『改撰標準日本文法』勉誠社
- 松村明編（一九六九）『古典語現代語助動詞助詞詳説』学燈社
- 森野宗明（一九七五）『王朝貴族社会の女性と言語』有精堂
- 山口莞二（一九九〇）『日本語疑問表現通史』明治書院